
キミがいる

saika

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミがいる

【Nコード】

N6432N

【作者名】

saika

【あらすじ】

ボクは学校でイジメを受けていた。

何が原因でイジメられていたかなんて分からない。

けれどずっと続いているイジメ。

だけどボクには親友の彼がいた。

明るく、優しい彼がいたからこそ、ボクは学校へ行けた。

彼のことを心から信じていたけれど…。

ボクはイジメを受けていた。

高校に入学したての頃は、クラスメート達とも仲が良かった。

だけど夏休みを過ぎた辺りから、様子が少しずつ変わってきた。

何がどうとは言えない。

かすかな違和感。

それが現実となるのに、そう時間はかからなかった。

靴入れが荒らされていたり、また靴自体が隠されていたり。

ロッカーに入れといた物が出されていたり、または体育着が切り刻まれたり…。

やられたことを語ると、一晩はかかりそうなことをされた。

でも犯人は分からなかった。

クラスメート達はボクがイジメられていることを知り、関わることをやめた。

担任が何とかしてくれようとしたが、結局全てがムダだった。

直接ボクに何かあったわけじゃないのが、せめてもの救いかもしれ

ない。

別に悪口を言われたわけでも、暴力をふるわれたわけでもない。
遠巻きにされているだけ。

無視されてもいないし、必要最低限は話をしてくれる。

—だから不思議なんだ。

誰が犯人なんだろう？って。

ボクは正直言つて、地味な人間だ。

自慢できる趣味や特技はないし、容姿だって平凡なものだ。

自ら目立とうとはしないし、平凡な人間だと思っている。

小・中学は、そこそこ平和に過ごしていた。

男女関わらず友達がいたし、孤独を強いられることはまずなかった。

なのに高校に入ってから、この異変はさすがに気落ちした。

イジメなんて小・中学で卒業しそうなものだが、未だに高校生でもやる人がいるんだと、ちょっと感心してしまったりもした。

いつまでも続く、誰が犯人か全く分からないイジメは、高校3年になっても続いていった。

ここまで続くと、ボクも周囲の人間も慣れてきてしまった。

イジメというより、嫌がらせというのかな？

すでに何が起こっても、大して動じない性格になってしまったのだ。

周囲の人達の対応も、すでに事務化しているのが怖い。

だからか、今でも不思議でならない。

犯人はボクをどうしたいのだろう？

学校へ来なければ満足なのか？

それとも精神的に参ればいいのか？

犯人の正体が分からなければ、問うこともできない。

そもそもボクをイジメて、何かおもしろいのだろうか？

「はあ……」

「何だよ？ タメ息なんてついちゃってさ」

「あっああ、キミか」

昼休み、誰もいない校庭の隅で食事していると、彼が来た。

ニツコリ微笑む彼とは、幼馴染だった。

幼稚園の頃に知り合って、小学校は同じ所へ通えた。

けれど彼のご両親の仕事の関係で、彼は引っ越してしまった。

だから中学は別だった。

しかし交流は続いていて、高校は同じ所へ行こうと約束をして、それは叶った。

高校1年の時は別のクラス、2年は同じクラス、そして3年の今はまた別のクラスになってしまった。

だけど相変わらず、ボクのことを気にかけてくれる。

「ヒドイ顔で食事をしてても、美味しく感じないだろう?」

「そんなにヒドイ顔してた?」

「ああ、ゾンビも真っ青な顔」

… どういう顔だよ?

「何だ何だ、進路のことか?」

「まあね。やっぱりボク、キミと同じ大学には行けそうにないと思うな」

「んなこと言うなよ。勉強、手伝ってやるから、同じ大学行こうぜ」
そう言いつつ、彼はボクの隣に座った。

「ボクも同じ所に行きたいけど…ボクの成績じゃあね」

彼は高校入学時から、トップをキープしている。

それは勉強に関わらず、運動や人望でも言えた。

なので二期に渡って、生徒会会長まで務め上げた。

ちなみにボクは彼の推薦で、生徒会書記をした。

だけど彼と違って、勉強も運動神経も中レベル。

容姿だって、街を歩けば女の子が振り向くような彼とは、つり合わないほど平凡。

何で彼のような人が、未だにボクと親しくしてくれるのかが分からない。

大学も同じ所を目指そうと言ってくれたけれど、彼は推薦で通るだろうけど、ボクは必死に勉強しなければムリだ。

「今から間に合う気がしないんだよね」

「何弱気になってるんだよ！ オレと同じ大学、行きたくねーのか？」

「行きたい気持ちはあるけれど、それよりもレベルが高過ぎる」

「そうか？ じゃあもうちょっとレベル下げるか？ 近くなれば、

あの大学が良かったんだけどな」

…レベルじゃなくて、距離で選んでいたのか。

こついうところ、彼らしい天然っぷりだ。

「でもキミなら行けるレベルだろ？ 何もボクに合わせなくていいんじゃない？」

「何を言ってるんだ！ オレはお前と一緒に良いんだよ」

芝居じみたセリフと動作だけど、どこか心温まる。

「ありがと。そう言ってくると、嬉しいよ」

ボクがイジメを受けても学校へ来れたのは、彼のおかげと言っても過言じゃない。

落ち込んでいるボクのことを気にかけてくれる。

嫌がらせをされた後、どこから聞き付け、いつも助けてくれる。

その時、笑顔でボクを慰めてくれるから、ボクは救われていた。

クラスが同じ時はずっと側にいてくれた。

クラスが別になっても、休み時間や昼休み時間にちよくちよく教室に顔を出してくれた。

放課後や休日では、2人でよく出かけている。

だから寂しくなんてなかった。

1人じゃなかった。

彼は明るくて優しい。

人を思いやる気持ちがある人で、一緒にいると気持ちがとても落ち着く。

「それにさ。大学に行けばクラスなんてないから、今よりずっと一緒にいられるだろう？」

「キミは大学行ったら遊びそうだね」

「そりゃ遊べるだけは遊ぶさ。いろいろ開放的になるだろうしな」

そう言っただけなのに笑う彼を見ると、本当に楽しそうだと思う。

「だけどボク、大学受かるかな？　かなり生活面では問題児だし」

この3年間、ずっとイジメを受けてきたのだ。

内申書は想像するだけで怖い。

「学校はそんなこと内申書に書かないって。それにお前は二年間、生徒会書記を務めてたんだから」

「それはキミが誘ってくれたから。周囲の人だって、渋々受け入れたようなもんだし」

彼は発言力もあつた。

だから彼に逆らえる人は、先生の中でさえ少ないだろう。

「そんな暗い考えに捕らわれるなよ。イジメなんて高校卒業すればなくなるんだし、大学には大人がたくさんいるから、イジメを受ける心配もなくなるぞ?」

「分かつちやいるんだけどね」

「心配なんてするなよ。オレがいるだろう?」

彼の笑みは、心から安心できる。

だからボクも笑顔になる。

「うん、ありがとう」

「礼なんていいって。親友だろう?」

肩を抱かれて一瞬戸惑う。

だけど彼の言葉がとても温かい。

「そうだね」

「んじゃ、大学はオレの方で改めて探しておくわ」

「本当に良いの? ボクのレベルに合わせるなんて…」

「いーのいーの。勉強だけが全てじゃないだろう？ 大切な幼馴染兼親友と過ごす時間も大切なんだ」

「…そう言ってくれると、救われるよ」

「オレはお前が側にいるだけで、嬉しいからな」

「うん…」

彼には感謝の気持ちと、申し訳ない気持ちがある。

でもまだ好意に甘えていたいと思う気持ちが強い。

だから…いずれ彼がボクから離れる時は、邪魔にならないように潔く引く覚悟はしていた。

人気者の彼は大学や社会に出れば、あつと言つ間に多くの人に囲まれるだろうから…。

「なあ、今度の休み、映画見に行かないか？」

「いいよ」

彼は雑誌を広げ、ボクに見せた。

いつも2人で出かける時は、彼から誘ってくれる。

「この映画、クラスの連中から聞いたんだけど、かなりおもしろいらしいぜ。何回でも見たくなるって」

「へえ、おもしろそうだね」

「ああ、だから見に行こうぜ」

彼は気を使つてか、遊びに行く時はボク1人しか誘わない。

ほとんどの時間をボクと過ごしてくれるので、一度聞いたことがある。

「あの、さ。ボクと2人だけで、つまらない？ 他の友達から誘われてたりしたら、そっちに行ってもいいからね」

「なあに言つてんだよ。オレはお前と2人で遊んだ方が、楽しいんだよ。だから気にすんなって！」

満面の笑顔でそう言われたので、ボクは二度と同じことを言わなかった。

優しくて頼りがいのある親友。

…だけど頼りっぱなしじゃダメだ。

せめてイジメの方だけでも、ボクが何とかしなきゃ…！

彼はイジメのことについて、怒りを覚えている。

何かされると、ボクより怒って見せる。

だけどボクを励ますことを優先にしてくれる。

だからイジメに関しては、あんまり関心を持っていない。

まあ何ともできない状態なので、関心を持ってもしょうがないんだけど…。

でも大学に進学することを考えたら、このままイジメられるのもダメだろう。

…だから思った。

ちゃんと彼の側にいられる為にも、せめて犯人に一矢報いたい。

ボクは考えた。

犯人をせめて断定できる罠を。

今度はボク自身から、打って出る。

ボクは誰にも内緒で、計画を立てた。

彼と一緒にいられる為に。

そしてボクを3年間も傷付けたヤツに、一度でいいからダメージを与えたかった。

ただ、それだけだったのに…。

<パリンツ>

ガラスの割れた音は、意外に軽かった。

透明で薄いガラスの破片は、それでも傷を付けるには充分だろう。

ボクは今まで受けたイジメの内容を、ノートにまとめて書いていた。

その中で多かったのは、ボクの私物の紛失だ。

大して高い物は取られていない。

それこそペンやノートといったものだ。

だからノートに罫を仕掛けておく。

ボクが割ったガラスは、とても薄い。

ヤスリを使って、ガラスの破片を削る。

すると切れ味がとてもいい、透明の凶器の出来上がりだ。

ボクはそれを、ノートに仕込んだ。

普段そのノートは使わない。

ただ机の中に入れておくだけ。

ボクの名前とクラスを書いて、放置しておく。

犯人は絶対、このノートを盗むだろう。

ただ触れただけでは、罨には引っ掛からない。

ちょっとした動きをすれば、罨は発動するだろう。

それはまあ、一種の賭けとも言えなくはない。

ただ今まで盗まれていた物は、決して後から見つかるとはなかった。

ゴミ箱を探しても、至る所を探しても、見つからなかった。

外で捨てられた可能性もあるだろうけど、犯人が持っている可能性だってある。

ボクは後者に賭ける。

ノートを机に入れっぱなしにしてから10日後、動きがあった。

放課後、担任に呼ばれて職員室に行った後、机の中に入れていたノートが無くなっていたのだ。

「…本当に持ってたのか」

自分で仕掛けといてなんだけど、本当に持っていくとは思わなかった。

ちょっと感心していると、ケータイが震えた。

開けて見ると彼からで、急用ができたので一緒に帰れなくなったとのことだった。

少し寂しかったけれど、よくあることだった。

彼は未だ前生徒会長ということで、後輩から頼られることが多い。

分かったと返事を送り、ボクは1人で帰ることにした。

罨が早く発動することを願いながら、家に帰った。

しかし次の日になっても、また数日が経過しても、罨は発動した気配は無かった。

今はみんな夏服で、薄着をしている。

だから罨が発動すれば、すぐに分かる。

でも少なくともボクの近くにいる人で、罨にかかった人物は見当たらなかった。

ノートを開かなかったのだろうか？

…そうすると、失敗したことになるな。

盗んで捨てられたら、罨など意味が無い。

残念ながらも、ちょっとほっとしている自分に気付く。

罨は絶対に、傷付ける。

誰かを傷付けるのはあんまり好きじゃない。

今回はずっとボクをイジメ続けていたヤツだからこそ、罨を張ることにしたんだ。

でも…やっぱり意味が無くなったのなら、それで良い。

ボクは考え直すことにした。

しかし罨は別の意味で、威力を発揮した。

あのノートを盗まれた後は、何一つ、イジメを受けなかったのだ。

何も起こらないことに、ボクどころか周囲の人達も不思議がっていた。

だけど起こらないなら、起こらないでいい。

静かで平凡な毎日を過ごせるのなら、ボクはそれで良かった。

刺激的な生活なんて、真っ平ゴメンだ。

「なあ、今度の休み、ウチに遊びに来ないか？」

昼休み、いつもの校庭の隅で彼と昼食をとっていた。

彼は何かと忙しい人だけど、ボクと遊んでくれる。

「良いよ。家族の人、いないの？」

「ああ、両親は仕事。姉貴はバイトだって」

彼の両親は共働きで、お姉さんは大学生で何かと忙しいらしい。

だから週末や連休は、ボクが彼の家に泊まりに行くことが多かった。

「ついでに泊まってけよ。久しぶりだろう？」

「だね」

ボクは笑顔で了承した。

イジメのことも収まっていたし、たまには思いっきり遊びたい気分だった。

そして休日になり、朝から彼と駅前で待ち合わせをした。

新たに大学を決めたので、下見に行った。

電車で20分ほどだけど、駅から近い。

レベルもボクが後少し頑張れば何とかなる所だった。

「ここ、良いだろう？ 駅前には若者向けの店が多いし、通えたら楽しいぞ」

「そうだね。じゃあここにしようか」

「ああ、頑張ろうぜ。勉強はオレが見てやるから、塾とか家庭教師なんかに頼るなよ？」

「それは嬉しいけど…邪魔にならない?」

「ならないって。むしろ復習ができて、ちょうど良いぐらいだ」

彼の笑みと明るい姿は、見ていて気持ち良い。

「それじゃあお願いするね」

「おう! 任せろ」

大学の下見に行った後は、駅前をぶらついた。

途中、本屋で参考書を何冊か買って、彼の家に行った。

高級マンションに住んでいる彼の部屋は、ボクの部屋の2倍の広さがある。

けれどスッキリ片付けられていて、彼の几帳面さが表れている。

彼は雑把に見られやすいけれど、料理や掃除が好きで、器用な人だった。

ボクは不器用だから、いつも彼の手助けが必要になる。

「適当に座っててくれよ。今、お茶持ってくるから」

「うん」

彼が部屋から出て行くと、ボクはため息をついた。

大学はいくらレベルを落としてもらったとは言え、油断は大敵。買ってきた参考書を机の上に広げた。

そこでふと、クローゼットが少し開いていることに気付いた。

「閉め忘れかな？」

彼にしては珍しい。

ボクは立ち上がり、クローゼットの前に行った。

そこで中が少し見えた。

「ん？ ……金庫？」

クローゼットの中は、服がかけてあった。

しかし服の奥に、四角く黒い金庫があった。

「しかもダイヤル式の……。珍しいな」

思わずジロジロ見てしまう。

彼がこういうのを持つタイプだとは思わなかった。

そりゃあ隠しておきたい物があるのは、人間として当然だと思う。

けれどそういう物を、こういう金庫に入れるタイプじゃないと……。

「おつまたせー」

「おわっ!？」

声に驚き、クローゼットを閉じた。

「ん? どうした?」

部屋に戻って来た彼が、きょとんとした。

「あつ、少し開いてたから…」

「ああ、閉めてくれたのか。ありがとな」

えっ笑顔で感謝されると、胸がチクチクする。

「うっうっん」

「あつ、もしかして中見えた?」

「ちよっちよっと…」

「いいよ、そんな申し訳なさそうな顔しなくても」

彼は苦笑して、手を振った。

「金庫のことだろ? それ、高校入学祝いに叔父さんから貰ってさ。まあいらなくなったから、押し付けてきたってのもあるだろうけど」

「金庫なんて珍しいね」

「だろ？ 元々叔父さん、商売をしてて、売り上げをその金庫に入れてたんだ。他にも権利書とか、重要書類をな」

そう言いつつ、テーブルに麦茶とお菓子を載せた。

ボクはテーブルの前に座り、麦茶を飲んだ。

「でもオレが高校入学するちょっと前に辞めてさ。今は田舎で農業してるんだ。その時に貰った物」

「へえ。中に何か入れてんの？」

「まあな。使わなきゃ損だし」

「でも金庫に入れるような物だから、よっぽど大事な物？」

「んつとな…」

彼は珍しく動揺した。

「そっそんなに重要ってほどじゃない。その…写真とかだよ」

「写真？ 学校のとか友達のもの？」

「あっああ。ダチのだよ。もちろん、お前の写真あるぞ？」

「えっ？ 変な写真じゃないよね？」

「普通のだよ。小学校の卒業アルバムも入っているし」

「そっか」

写真を金庫に入れとくというのも変な話だけど、確かにそれぐらいしか入れる物はないだろう。

高校生のうちじゃ、そんなにお金もないし。

重要書類とかも、ボク達にとっては昔の通信簿レベルだ。

「それより、早速大学のことを説明するぞ」

彼は顔を真っ赤にしながら、書類を取り出した。

よっぽど恥ずかしい物が、金庫に入れてあるんだろうか？

ボクはちよつと興味を持った。

けれどその後、大学の説明に、受験のこと。

そして勉強へと目まぐるしく頭を使い、そのことをすっかり忘れていた。

勉強が一段落つくと、彼が夕飯を作ってくれた。

昨夜作ったというカレーは彼の特製で、とても美味しく頂けた。

その後、おフロを先に入らせてもらった。

「じゃあ、オレ、フロに入ってくるな。電話が鳴ってもほっというて

良いから」

「分かった。ゆっくり入りなよ」

「はいはい」

今日は頭を使ったせいで、2人とも少し疲れていた。

ボクは彼の部屋に戻った。

彼のベッドは広く大きいので、ボク達2人が並んで寝ても余るくらいだった。

「ふう……。疲れたなあ」

伸びをして、ため息を吐く。

彼はスパルタだから、この調子なら何とか受験は大丈夫だろう。体をゴキゴキ鳴らしていると、クローゼットが眼に映った。

「そう言えばあの金庫、どういう写真が入っているんだろうな」

彼は卒業アルバムが入っていると聞いたけれど、ボクの写真もあると言った。

「変なのは撮られていないと思うけど……」

でも彼は割とイタズラ心を持っている人だから、もしかしたら、変な写真を撮られているかもしれない。

特にボクはこの家に泊まることが多い。

変な寝顔とか、もしかしたら撮られているのかもしれない。

ボクは部屋の外に首だけを出した。

お風呂場から、水音と彼の鼻歌が響いて聞こえる。

しばらくは出て来ないだろう。

ボクは扉を閉めて、恐る恐るクローゼットに向かった。

クローゼットを開けて、金庫に手をかける。

だけど開いてはいない。

「まっ、当然だな」

ダイヤルを掴む。

こういう場合、彼の誕生日とかに設定されているのではないだろうか？

ボクはゆっくりと、彼の生年月日に回した。

けれど開かなかった。

「うーん…」

もし設定が彼の叔父さんが決めたものが続いていたのならば、ボクには永久に解けない謎だ。

とりあえず、思い付く限りの数を回してみる。

けれどどれもヒットしない。

彼の好きな数も、記念日も。

「もしかして…違う人の誕生日とか？」

彼の身内の生年月日を回す。

ご両親にお姉さん、でもムリだった。

さすがにボクでも知らない叔父さんのだったら、お手上げだ。

そろそろ彼はおフロから上がってくるだろう。

時間がかかり過ぎた。

ボクは最後にといい、自分の生年月日を回してみた。

<ガチャリ>

「えっ？」

金庫に再び手をかけると、開いた。

「ボクの…生年月日にしといてくれたんだ」

何だか嬉しい。

確かにボクの生年月日じゃあ、彼とボク以外は開けられないだろう。

ボクはゆっくりと扉を開けた。

中は二段の引き出しになっていた。

一段目を引くと、中からは本当に卒業アルバムが出てきた。

幼稚園と小学校のだ。

そしてその頃、彼と撮ったボクの写真のアルバムも出てきた。

「うわっ、懐かしい……！」

小声で叫び、ボクはアルバムを捲った。

どのアルバムも、ボクは彼と一緒にだった。

ボクは彼以外の人と写真に写るのが苦手で、苦笑気味になってしま
うのがクセになっていた。

でも彼とだったら、心からの笑顔で映れた。

「……でもいつまでもコレじゃあ、ダメだよな」

彼に手を引っ張られてばかりでは、ダメだ。

これから社会に出るのに、彼に依存してばかりでは、お互いにダメになる。

「もつとしつかりしないとな…」

彼に支えられてばかりじゃなく、彼を支える存在にならないと…。

そう思いながら、ボクはアルバムを元に戻した。

そして二段目に手をかけた。

「二段目は何が…」

しかし中身を見て、ボクは止まった。

ボクの体も思考も、全てが止まった。

引き出しに入っていたのは…ボクのノートだった。

例の…罾用のノート。

ノートは罾が発動したらしい。

真っ赤な血の色に染まっていた。

「なっ…んでっ…!」

震える手でノートを取ると、その下にあったのは…今まで盗まれていたボクの物。

さまざまなペンやノート、その他にもボクの方が姿を現した。

全部全部、盗まれた物。

ボクの手元から、消えていった物だった。

久々に見る物をいくつか触れてみた。

懐かしい姿と感触。

「どうしてっ…何で彼が持っているんだ？」

頭の中が真っ白だった。

体が小刻みに震えだす。

歯がガチガチと鳴った。

血の気が一気に下がり、目の前が真っ暗になる。

「アレ？ 開けちゃったんだ？」

「ひっ…！」

金庫に集中していたせいで、彼が戻って来たことに気付かなかった。

氣力を振り絞り、ゆっくりと振り返る。

お風呂上りの彼は、笑みを崩さない。

それがとても恐ろしかった。

「何でっ…どうしてキミがボクの物を持っているんだ！」

しほり出すように言った言葉は、思ったより小さかった。

声が、出ない。

思わず喉を撫でた。

「何でって、欲しかったからだよ」

彼はあっさり言った。

「じっじゃあ、あのイジメの数々も…」

「そう、オレが犯人」

目の前が一瞬にして、黒く染まった。

— 絶望。

そうか…。

コレが絶望、か。

「なんつで…どうしてっ…！」

出た声はすでにかすれていた。

「だってガマンならなかったから」

そう言つて彼は一步前に出た。

思わず後ずさる。

「ガマンつて何が…」

「お前が他の人を頼るのが」

「何を…」

何を言っているのか分からない。

「だって3年もガマンしてたんだぜ？ 子供だったらしょーがない
つてさ。だから同じ高校に入れるって分かった時は、飛び上がって
喜んだんだ」

彼はどんどん歩みを進める。

ボクはどんどん後ろに下がる。

「けれど高校じゃあクラスが別になっただろう？ それでオレより
仲良いヤツがお前にできるのが、許せなかった。ガマンできなかった
んだ」

彼は笑顔を浮かべているものの、その眼は狂気がにじみ出ている。

「だからイジメた。周囲の人間を使わなかったのは、関わらせたく
なかったんだ。オレとお前のことに」

「分からない…キミが何を言っているのか、分からないよ！」

ボクはノートを抱えたまま、叫んだ。

「まあお前には理解できないかもな。こういう歪んだ感情はさ」

彼は肩を竦めた。

「オレはお前に頼られたかった。唯一の存在でいたかったんだよ」

「なら何もこんな方法を使わなくてもよかったじゃないか！こんなことをしなくても、ボクにとってキミは特別な存在だったのに！」

「特別と唯一は違うよ。オレはお前に、オレだけを見ていてほしかったんだ」

「見てたし思ってたよ！ 例えボクにどんな友達ができたって、キミはボクの唯一の存在だったのに！」

両目が熱くなる。

ボクの思いは彼に伝わっていなかったのか？

こんなに近くにいたのに！

「それでもオレの他に仲良いヤツができれば、オレを思う気持ちは減るだろう？ それもイヤだったんだ」

ついにボクの背は壁についてしまった。

やつヤバイ、逃げなきゃ！

そう思うけれど、体が言うことを聞かない！

全身がガクガクと震える。

怖いっ…！

「そんなに脅えるなよ」

彼はそんなボクを見て、苦笑した。

「お前自身を傷付けるようなことはしなかっただろう？ それどころか、お前に何かしようとする奴らを消してきたし」

「消したって…」

「ああ、だから生徒会長なんかやってたんだ。権力というのは、持ってた方が何かと得だからな。お前に何かしようと思っている連中を、簡単に消せるぐらいは役に立つものだった」

「…あつ」

思い当たることがあった。

ボクも生徒会書記を二期に渡って務めてきたから、それなりに学校の情報には詳しくあった。

彼が会長をしている間に、数人の学生が退学になっていた。

その学生達はガラが悪く、よく人を脅したりイジメをしていた。
だから退学の原因も、素行の悪さからだと言っていたけれど…。

多分、彼等はイジメを受けているボクを見て、自分達も考えたんだろうな。

それを察した彼が、退学に追い込んだのか。

だとすれば、少なくとも十数人は彼の手によって…。

ボクは改めて、ぞっとした。

ボクを守る為だとも言える。

けれど彼はただ、自分の獲物を取られるのがイヤだったただけだ。

そう…彼にとって、ボクは獲物だったんだ。

彼が喰らう為の…。

「でもお前もやるねえ」

「…何がだよ？」

「そのノートだよ」

彼が指差したのは、ボクが抱えているノートだった。

「まさか細工をしているなんて思わなかった」

「じゃあ…この血はキミの？」

「うん」

彼はＴシャツを捲り、お腹を見せた。

そこにはうつすら赤い線を引いたような、傷跡があった。

「ノートを持っていく時に、バツサリ切れた」

ボクはその傷跡に、釘付けになった。

多分…ノートのページ部分をお腹に当てたんだろう。

ノートの罫とは、ページ部分に薄いガラスの破片を仕込んでいたことだった。

薄くて軽いガラスの破片は磨いたことにより、殺傷能力を上げていた。

ボクは犯人がページを捲る時、その指か手に傷がつけばと思っていた。

まさかお腹に傷がついていたなんて、考えもしなかった。

「人間も動物も、追い詰め過ぎると何をするか分からないもんだ」

「ボクの…せめてもの反撃だったんだ」

ボクはノートを見下ろした。

でもまさか、こんな結末を引き寄せるなんて…！

「うん。効果的だった」

すぐ間近で声が聞こえ、顔を上げると、目の前に彼が来ていた。

「っ！？」

思わずノートを落とし、逃げようとした。

「逃げるなよ」

ぐいっと髪を掴まれ、壁に投げ付けられた。

「がはっ！」

肺に入っていた空気が一気に吐き出た。

「逃げるなんてヒドイ奴だな。今までずっと側にいたのに」

「キミがつ…」

「ん？ なに？」

ボクはキミがいたから、救われていたのに…。

キミがいたせいで、イジメを受けていたなんて…！

感情の昂りが、涙となって溢れ出てきた。

「ああ、泣くなよ。泣かせたいワケじゃないんだから」

そつと伸びてきた彼の手を、ボクは渾身の力で払った。

<パシツ>

「…やってくれるな」

彼の笑みが、複雑に歪んだ。

「っ！？」 さつ最初からボクをイジメず、夏休みを過ぎた後から行動したのは何でなんだ？ キミに何があったんだよ？」

ボクは犯人に聞きたかった。

何が原因で、ボクをイジめるようになったのか。

「ああ、簡単な話さ。夏休み、オレと遊んでいた時の話だ。偶然、街中でお前のクラスメート達と会って、一緒に遊ぶことになっただろう？ アレが原因」

ボクは瞬時に記憶をよみがえらせた。

確かに1年の時の夏休みに、そういうことがあった。

街中で彼と遊んでいたら、当時仲の良かったクラスメート達と偶然出会った。

そして一緒にボウリングに行かないかと誘われ、ボクは頷いた。

「でっでもキミに聞いたら、一緒に行っても良いって言ったじゃないか！」

「そりゃあみんなの前で、イヤだとは言にくいもんだろう？ それにその時は、そいつらと一緒にでもいいと思ってた。でも…」

そこではじめて、彼の表情が曇った。

「クラスメート達とはしゃいでいるお前を見て、暗い気持ちになったよ。お前はオレ以外の人間と一緒にいても、楽しそうだから」

「そんなのっ…キミだって同じだろう？ ボク以外の人といても」

「オレはお前以外の奴と一緒にいても、おもしろいとも楽しいとも思ったことなんて、一度たりとも無い」

ボクの言葉を遮り、彼は断言した。

「あの時から、ドス黒い感情に支配されていることに気付いたよ。そして夏休みが終わり、学校がはじまった途端、行動に出た。自分でも驚いたさ。まさかあんな行動に出るなんてな」

彼は自嘲気味に笑う。

そして自分のお腹の、傷の部分をそつと優しく撫でた。

「この傷、そろそろ消えるだろうな。お前の付けた傷なら、永久に

残っても構わないのに」

「っ!？」

その慈愛に満ちた表情と声が恐ろしくて、ボクは彼から眼を背けた。

こんなに近くにいたのに、ボクは気付かなかった。

彼の苦しみも、そして狂気も！

震える体を何とか動かし、壁伝いに彼から離れようとした。

くだんっ>

「ひっ!」

「どこ行くんだよ？」

けれど彼は手を壁に付けて、ボクの行く手を塞いだ。

こっ怖い！

彼の存在全てが恐ろしくてならない！

歯がガチガチと鳴り出す。

泣きそうな顔で、恐る恐る彼の方を見る。

彼は微笑んでいた。

今まで見たことがないぐらい、温かく優しい笑みを浮かべていた。

「逃がさねーぜ？　ずっとこの時を、待ってたんだ」

ゆつくりと、彼がボクに覆いかぶさってくる。

もう…逃げられない。

けれどどこか、納得している自分がいる。

ボクを支えてくれた彼。

ボクをイジメていた彼。

二つの彼は、ずっとボクの側にいたんだ。

そして彼はこれからもずっと、ボクの側にいるだろう。

そのことを、ボクも望んでいるから…。

そう…

彼の存在があるから、

彼がいるから、

ボクがいるんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6432n/>

キミがいる

2010年10月10日11時49分発行